

# 「県北初」で地域に寄与

## 苦難と挑戦

県立大50年の歩み

①

県立大（佐世保市川下町）が開学し、今年50周年を迎えた。期待に沸いた草創期、少子化の波が押し寄せた低迷期、公立機関としての在り方と大学の独立性との間で葛藤した時期もあった。取り巻く環境の変化に苦しみながら答えを探り続けて半世紀。県北初の四年制大はいま、新たな挑戦を始めている。

真新しい講義室を、学し、正門にバリケードを生服に袖を通した若者が、つくって守ったこともあ埋め尽くしていた。寮は、た。 「できたばかりの大学なく、住民の家に間借りする学生がほとんど。同好会はつくり放題だった。学生運動の最盛期。大学をアジトにしようと、眺めながら懐かしそに

### 開学と発展



県立大の前身、県立国際経済大の開学式の様子  
=1967年6月（県立大提供）

記憶をたどる。五島市出身。親からは県外進学も勧められたが、「新設大学」という響きに引かれた。1967（昭和42）年4月。県立大の前身、県

立国際経済大は県立短期大佐世保商英部を四年制大に昇格させて開学した。当初は経済学部経済学科だけの単科大学で定員は200人。すぐに「国北初」の四年制大、そして県教育機関に、おのずと地元の期待は高まった。

「特に私たちの年次は学生運動の影響で東大受験がなかったこともあり、進学校に通う多くの生徒が国経大に集まった。著名な教授もそろっていた。現在も県内外で活躍している同級生は多い」  
3回生で佐世保市副市長の川田洋（67）は、地元優秀な生徒に「選ばれた大学だったと証言する。」  
（後藤洋平、中島宙）

経大の略称で親しまれるようになった。戦後の混乱から急速な復興を遂げ、世は高度成長期の真っただ中。国民の向上意欲は高く、「県北初」の四年制大、そして国際水準に合わせる動きが活発。同学科の新設は、国立として初めてこうした視点を学問に反映させる試みだった。

同時に大学の名称も現在の「長崎県立大」に変更。2年後の93年には大学院経済学研究科（修士課程）を立ち上げるなど短期間で改編を続けた。流通学の先駆者で、「県立大」の名の下で初の学長に抜てきされた鈴木武（86）の当時の発言が、大学に残っている。

「名実ともに県立大学として、研究成果の還元、地域社会の発展に寄与し、学術文化の中心となる大学へと発展することを期する。」  
（文中敬称略）